

一八八六年四月二十四日(土)

〔タクール、聖ラーマクリシユナと信者の妻子〕

今日は土曜日。四月二十四日。一人の信者が来た。妻と、七才になる息子を連れてきている。一年前、八才になった息子が亡くなって、その悲しみのため妻は気が狂ったようになったのだった。それでタクール、聖ラーマクリシユナは、彼女にときどき自分を訪ねて来るようにとおっしゃって下さった。(訳註、一人の信者——マヘンドラ・グプタが使った仮名の一つ)

夜、大聖母(タクールの妻、サーラターマニ・デーヴィー)が、二階の広間にタクールにお食事をさしあげるため上がってこられた。信者の妻が灯火(あかり)を持ってついて来た。

食事を召し上がりながら、タクールは彼女に、いろいろ家庭についておききになった。そして、いつか数日間ここへきて、大聖母(タクールの妻)といっしょに暮らすようにとおっしゃった。そうすれば、子を失った悲しみがずっと薄らぐだろう。彼女にはまだ乳飲み子の娘が一人いる——のちに大聖母(タクールの妻)はその娘のことを「マーンマイー」と呼んでおられた。タクールは手まねで、その赤子も連れてくるようにとおっしゃった。

タクールのお食事の後、信者の妻が食器を下げた。タクールとはばらく話をしていたが、大聖母(タクールの妻)が階下の部屋に行かれるとき、彼女はタクールにごあいさつしてから、いっしょに階下に降りていった。

夜の九時ころ。タクールは信者たちと共に、その部屋に坐っておられる。首に花輪をかけていらつしやる。モニが扇いでいる。

タクールは首から花輪を外して手にお持ちになり、何ごとか独りごとをおつしやる。そのあとで、その花輪を満足そうな面持ちでモニに下さった。

子を亡くして悲しんでいる信者の妻に、数日間ここへ滞在して大聖母シュリー・シュリー・マと共に暮らすようにとおつしやったことなどを、モニはすべて聞かせていただいた。